早川徳之助録

繪本西郷伐記

藤田東湖

第四号

木宗版

西郷吉之助

A440
1

早川徳三助編輯
松月保誠画

繪本西郷一代記

東京書肆　小森宗次郎版

勝安房ハ東京の人なりて方ホ文武を兼られ
利宇太郎と唱
られ〳〵時
より文
武ヨ勉
強して
安房守
ホ至り戊
辰の際西郷氏ヨ
説をうけて後参議ヨ任ぜらる

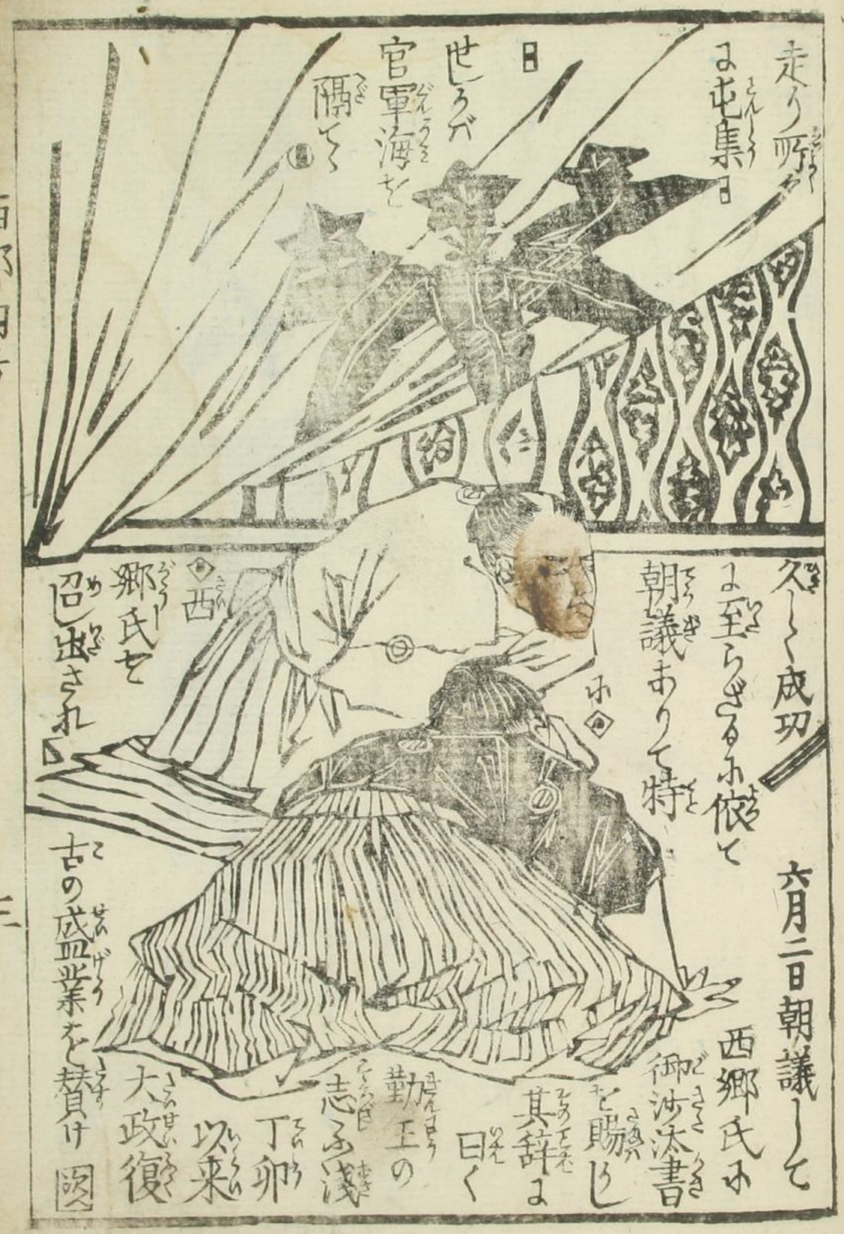
勝安房守像

48-7907

繪本西郷一代記第四號

早川徳之助編輯

擊賊の儀を命せられしに西郷氏速に西郷吉之助御受け申出で人に語けるは吾此行は三十日と期し成功を奏すべしと果して其言の如く東北既に鎮平に及び叡感斜めならず西郷氏を拜して參議に任ぜらるゝ西郷氏之を辞して受け給はず遂に薩より入る明治三年



●任ぜられ六年四月陸軍大將に任ぜられ参議を兼ね居られしが十月朝堂征韓の大會議あり時西郷氏より征韓の事を主張せられ其說合せして遂に職を辭し國に歸り山野に徜徉して風

其圖ふ中り竟に成功を

●皇續く參謀の命を奉じ東京城を收め其後北越へ出張軍務所精揮

木戸準一郎

緩急

奏し奉安宸襟候設慮感ふ糾

詠を除き朝廷屢召せども病

書を下賜り遂に

此御沙汰下賜車

仍爲其賞一千石

西郷氏を召起て

木戸準一郎を稱

二條に行て

將軍慶喜に應せず

を解く

正三位に叙し參議に

又逢ず客來

図

つゞき 折ふし門外より出で行らるゝも其行所を考らせとのふ或人西郷氏に問ひける君最早世を思ひ出るとのあるやと西郷氏答へけるやう行ゆく止る唯今日言ひ考るべきよあらせ三四年を待つべしと答へ給ふ

西郷吉之助

辞せずして朝廷許して給ふ因て其禄を賞して邑を謀り私学校を設け西郷氏ゆも時々校に入りて諸生をそゝぐはし又諸生数名を魯西亞に遊学せしめらる西郷氏近作一絶を得て爰に登記して看客の其西郷氏の

西郷氏先に賞典禄を辞

心の中を思ひ

幽居夢覚
起茶煙霊
境温泉洗
世緑地古山
深静於夜
不聞人語
只看天
斯く詠
詠を吟て
居ける心の
底を知る者

しとめや頃しゝ
明治七年一月はじめ
佐賀縣下にて
故参議の
江藤新平なる者巨魁となり
暴挙まで及びけるも忽ち官軍
の追撃せらるゝ所
賊魁
江藤新平は去
年の冬こゝを西郷氏と共に
左援右援の重位に居り
殊さら征韓の議會ゆへ
論車同撤の友あれば今期く
征韓の
事は
再び
挙をつゞく

世を潛ぶ落
身と成るとも
鹿兒
島小
至り
身を
西郷氏のもとに
寄せ猶
將軍慶喜

つゞき

共に謀らんと佐賀より送て西郷氏の許に潛を来り吾忠義の奥を打ちあひ慂援あれと懇々頼みを及び〜

江藤は腹案相違して空しく立ち戻れ

程なく天戮をうけし後萩熊本の暴どう有り西郷氏のきうゑんを

西郷氏は更に諾せる気色なく江藤は答らるゝ俱に廟堂の上に立ち天下の爲に事を議し且征韓の議事に至りては危る同意に待れども君今何等不満の有ゝ世に一度錦旗を敵せる時は王朝の

▲賊は一一もそ則ち吾が爲にうんぬん君ぞ知己の友なれど思ひもよらぬ返答ゆゑ▲

慂ぜべ死去年迄

望とゝへども声援の聞へ

ぐるまの〜日々学校生徒と成り或は山野荒田を開拓し自ら牛馬を率ひ耕耨し世路の

■怒風波を避けあり已形勢ハ所謂孔明臥竜あうと世の人けいゞせる事幾ろ〳〵ぞ。因こゝふ西郷氏征韓の議會りそいろゝある主意の説あるや

■帰国後よ篠原ハ答ヘ

■其大畧を想像せべきあり今原文のまゝをあるす

。朝鮮の儀ハ數百年間ハ其間ハ葛藤を生じ其ハ五六年談判ハ及び今日其結局ハ立交際の國にて御一新以来

知らぬことの人どもゝ

書翰をそそ■

至り候所全く交際無之國と同様の戰端を開候儀殊ゝ遺憾千万ハ御座ハ假令此戰端を開くゝよせよゝ最初測量の老臣勝安房守儀を相断り彼方兼諾の上図

010190507918

一号二号三号
四号五号六号 明治十年十月廿九日御届

定價三錢

編輯人 猿樂町十五番地 早川徳之助

出版人 馬喰町四丁目十八番地 小森宗次郎